

2026年2月1日（顕現後第4主日、A年）

メッセージ

「幸い」

（マタイによる福音書5：1-12）

司祭ヨセフ太田信三

今日はいわゆる「山上の説教」の箇所です。詩編2：12「いかに幸いなことか 主を避けどころとする人はすべて」とあるように、旧約聖書の伝統で「幸い」とは、神と人との関係のなかで起こされることです。そのような前提抜きにこの箇所を読むなら、ただの現実離れした精神論、楽観論と捉えられてしまうかもしれません。神との関係のなかでこそ、私たちには想像も及ばぬ「幸い」が実現します。

「幸い」の祝福はどのような人にもたらされるのでしょうか。3節の「貧しい人々」と5節の「へりくだった人々」は、同じヘブライ語に辿り着くとされています。それは「背を曲げる」というヘブライ語です。富や人に頼ることができず、たとえば経済的な貧しさのなかでも、ひたすら神により頼む貧しい人をも意味します。さらに10節には、「迫害された人々」とあります。これらを合わせると、今迫害のなかで悲しみ（4節）、抑圧のなかで神の前に背を曲げ（5節）、神の正しさ、救いを待ち望む（6節）人々に幸いがある。また、そのようななかでも、神にのみ頼り、柔軟に耐える人々には、神からの幸いがある、とイエスは語っています。

続いて7～10節では、迫害、抑圧の中にあっても、抑圧する者を憐れみ、彼らとの間に平和を実現しようとする人は幸いである、とイエスは語ります。「憐れみ深い人」とは、他者を赦す心を持つ人のこと、8節の「清い」は思いと言葉と行いとが一つであること、つまり日々の生活や行いにおいて二心の無い人のことだと言えます。このことから、他者を愛し、ただ一つ信じる者が「平和を造る人」であり、幸いな人だということです。

11節からは、言うなれば、励ましの箇所です。なぜなら、ここから語りかけが「その人たち」ではなく、「あなたがたは幸い」だと変わるからです。イエスが励ます、「あなたがた」とは誰かといえば、まず、当時迫害に苦しんでいたマタイによる福音書著者が属していたクリスチャン共同体です。そして同時に、困難な状況にあるすべての弟子たちです。イエスはそれらの人に、人や自分の価値観に固執する者ではなく、日々、神にのみ頼り、柔軟に耐える人々は幸いであると伝え、励ましているのです。そのような人々がこの世に平和を造り出すのであり、幸いな人です。そのためには、圧迫されても耐え、貧しく生きて、謙遜を失わないようにしなければなりません。イエスでこそが、その道を歩まれました。イエスはさまざまな圧迫にあっても、それを耐え忍び、敵を愛し、彼らとの平和を実現するために十字架に登りました。私たちは、自分の力だけではイエスように歩むことはできません。しかしだからこそ、「幸い」と言われるイエスの励ましを受け取ることができるのです。イエスの背中を仰ぎつつ、イエスの言葉に励まされながら、幸いな道を歩んで行くことができますように。